

昭和四十八年、松山市へ転出

短歌誌「青垣」へ入会、現在に至る

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正六年九月八日

愛媛県南予の漁村に生まれ、実家は網元。小学校を卒業とともに青雲の志を抱いて挿絵画家を目指し、日本通信美術学校に学ぶも、大病のため断念する。六年間の闘病生活で健康を取り戻し、昭和十四年、満蒙開拓団に入所。その間、第三副団長、購買・販売係長を務めるも再び病気に倒れ、南地区部落長となる。

昭和十九年六月、孫呉二〇二部隊に召集。二十年八月の終戦後、入ソ、抑留。

昭和二十二年復員後は、家業の巻網漁船に父と従事。昭和四十八年、松山市へ出て製材所に勤める。やはり身体の調子が悪かったが、頑張って人生を生きってきた。昭和三十年には母校、戸嶋村嘉島小学校の校歌を作詞。昭和四十二年には「開拓団愛媛村の先駆者たち」を出版。昭和五十四年ごろから短歌を学び、歌誌

の会員となり、平成六年には歌集『渦汐』を發行。

生来病魔に再三見舞われ、闘病を続けながら現在も頑張っているらしいです。

“正直とまごころ”を座右の銘としている、努力の人です。

(愛媛県 山本 繁夫)

### 曲想の譜 シベリア

愛媛県 山村 眞

(旧姓 岡原)

私は、愛媛県南宇和郡一本松町に、農家の二男二女の末っ子として生まれた。父は私の幼い時に他界して、母により養育された。大正十三年十二月十二日、即ち戦争の世紀に生まれ、やがて国家の干城として大命を奉ずる運命にあった。

日中戦争は、遂に世界列強を相手として有史以来の大戦争に突入した。緒戦の華々しい戦果に酔いしれた

る時は長くはなかった。太平洋上の重要拠点が玉砕の悲報を伝えるに至り、軍国少年の道は一つ、一日も早く米英撃滅の戦場に馳せ参じることと決心した。

念願叶って、陸軍特別幹部候補生第二期生として三重県鈴鹿市の中部第一三一部隊に入隊、昭和十九年八月十五日、皇軍の一員となった。そして四カ月航空氣象兵として厳しい訓練を終えて、各戦闘現場に展開して行った。

私たちはすべて行動秘密裡に満州第二氣象連隊に転属した。昭和二十年一月十二日冷たい新京駅に到着し、ただちに大房身教育隊に入り、晴れて栄光に輝く、泣く子も黙る関東軍の一員となった。

演習場は緑の高良台であった。ここでは高層氣象観測が主たる教課で、毎日巨大な紅白の氣球を飛ばして、一見のどかな雰囲気の中で、南方海域の死闘や沖縄の戦場等想起することもなかった。

ある日、対空無線機からハワイ放送が入った。日本がポツダム宣言の受諾条項等と称してまさに驚くべき内容を聴いてしまった。戦友とデマと一笑したが、上

官に伝えることもできず、二人で不安を抱いていた。

そして八月八日未明にロシア軍機の空襲が満人街に行われ、無法な開戦攻撃を知ることになる。私たち氣象通信各五人は南嶺本部要員としてただちに南嶺へ急行、中島少尉の指揮下に入る。臨戦態勢に入った本部でも、何か不安を予感してか、空気がピリピリしていた。

南嶺は高い要所であり、眼下の市街一角から白煙が上り、銃声も散発していた。一団の騎馬軍団が数百騎、白煙の方を指して砂を巻いて駆け込んで来る、かの光景は今も目に残っている。満軍の暴動か、わが軍か。そうして運命の八月十五日を迎えた。

天皇陛下の重大放送が行われるとして、部隊の中央にラジオが据えられていた。

大田部隊長の号令で全軍ラジオに向かって敬礼した。思うに一億総玉砕の決心でこの戦局当たるべしのお言葉を待った。全員の目は輝いていた。しかし流れ来る玉音は、雑音の中で沈痛な響きとなって慟哭の坩堝と化した。国体の護持と神州の不滅を信じ、国体の

精華を発揚し、世界の進運に後れぬようにとの要旨であった。

大田部隊長の訓示、まさに言々悲痛の叫びであり、預かった陛下の赤子たる部下全員の帰国により戦禍に痛む日本国土の復興に努力すべしと訓され、軽率妄動を禁じた。さらに、一身に代えても兵の帰還を実現したい旨の訓示であった。

部隊は異様な惨状を呈するに至るもわれわれにはなす術もなき始末であった。われら少年兵の頭の中にはそれまで日本軍の必勝あるのみだったからだ。敗戦時になすことを、誰かが私に向かってどうするのかと言ったが私は相談する人もなく、上官たちは私たちには判らない仕事と自分の行動をどう律するかで、私たちには自己に属する兵器類の始末の指示で手いっぱいを感じてあった。

私は四人を誘って兵營の裏手に集まった。私は一死報国、戦場で死ぬことが奉公の道と考えていた。会津白虎隊の故事にならって、ここで死ぬかと言った。皆一様にウンと短い言葉であったが、考えていること

は同じであった。不思議と皆落ちついてきた。私は短剣を抜いて刃を試してみた。これでは切れない。煉瓦で研ごうといって、ゴシゴシと研ぎ始めた。皆同じ要領で研ぎつづけた。皆、無言だが各々に想いを巡らしているようだ。

私は入隊前に二年間、山口県の光海軍工廠に鉄の戦士として、学徒動員、女子挺身隊や一般少年工員とともに団体生活をしてきた。女子隊員は中四国から兵器増産のためにハンマを振るい、旋盤工として紺一色の作業服で油にまみれ、手に傷を負いながら、ただお国の為にと働いていた姿を思い出していた。私の出征のための送別に大勢の見送り人に交じって素晴らしい送辞と涙の万歳を叫んでくれた人たち、かの工廠はどうなっているだろうと、肉親の安否と一緒に日本にいる人たちのことを考えていた。しかし、一瞬に近い走馬灯である。その間にも、兵器を窓から叩き落とす音、怒鳴り合っているような喚きが営内に満ちていた。銃撃は絶え間なく四方で聞こえていた。

その時、規則正しい軍靴の音が近づいて来た。私

は、はっとわれに返っていた。その人は中島少尉殿であった。私たちが見えないので氣遣って捜しておられた様子であった。

まず「君たち」と鋭い一声が浴びせられた。私たちは一斉に立ち上がり拳手の敬礼をした。剣が小さな音を発して土間に落ちた。そして、諍々じめつ々んと死ぬことを戒めて皆の肩をやさしく叩いた少尉の両目から涙が溢れていた。私たちも肩を震わせて泣いてしまった。私たちも朝以来の大変動の中で蓄積された恐怖と、それを跳ね返すように自刃の着想を是とした純真さを、少尉殿は感激として受け止め、涙の諫めいさめになったと思ふ。

私たちは、死神の感傷を払い除けていただいた言葉に応えて、もう絶対死なぬぞと皆に言った。皆で中島少尉殿についていきますと誓った。剣を拾って拭いて鞘に収めた。天皇の剣ではあったが、すぐ後日、武装解除の羽目になった。

中島少尉殿は立派な軍人であり人物であった。シベリアにおいても真面目な起居振る舞いで、寒い夜の臨

時出番にも私たちと一緒に働かれた。そしてともに復員されたが、シベリアの生活苦のため一年後に病死された。誠に哀悼の極みであり、深甚の祈りを捧げます。

今一つ、私の青春の中に前述した光海軍工廠の始末記がある。終戦の前日十四日に、米軍のB29による爆撃により工廠は廃墟になり、非戦闘員たる工員多数は銃撃され殺傷された。八月六日の広島原爆投下、そして八月九日の長崎への原爆投下、この一日前にソ連軍の満鮮、北方・千島、樺太への侵攻開戦は、米ソ両国の共同作戦であり、ポツダム宣言受諾への詰めと思ふが、誠に無念の極みである。

関東軍のソ連軍と戦闘した国境周辺の惨状は、一部の人が知るのみか。だとすれば戦史に正しく残し、散華された将兵及び開拓団あるいは在満一般人の無法無保護の中に落命された人々の実態をなすだけ調査し、鮮明にすべきと思ふ。

私たちは八月十六日家屯において武装解除を受け、ソ連軍の意のままに連行された。惨状、ペンを執るも

歯がゆい極みであった。われらが曳かれ行く満州の土地は、建軍以来約五十余年、忠烈勇武の在満軍人が血潮に染めた祈りの大地であった。泉下に眠る英霊は、皆号泣して曳かれ行く関東軍将兵を送ったことと思う。

身に寸鉄も帯びぬ者を、連行を繰り返して、体力氣力を失う状況の中でダモイと称して貨車に詰め込み施錠をして囚人移送の如く扱った。ブラゴエを越えた時はシベリア直行を感じてきていたという。沿線の異物の落とし物で、幾方の日本人がシベリアに連行されていたことは認められた。まさに忍従の連行であり、十月二十日頃イルクーツクに到着した。

徒歩で一時間も歩いたか、寒風の中の収容所は闇の底に黒々と横たわっていた。周囲は鉄条網で嚴重に囲われていた。四隅の監視塔には例のマンドリンを肩にして立哨していた。第三十二収容所第七分所と記憶している。川と駅が近くにあったように思う。その日から昭和二十二年三月末頃まで、他に移動することなく、昼夜の別なく作業現場で最低の掛け声に律せられ

て心身を勞した。

食事、衛生、保健は一国の囚人扱いにしても酷使の極みであった。特に苦々しく思った作業は、旧日本軍の掠奪物資の荷降ろしであった。莫大な数量のこれ等は日本人の血肉に替えた物品であり、その意味で皆が腹を立てて泣いた。石炭、木材等は、これも同胞がどこかの山で、炭坑で口やかましくノルマを課せられての必死の作業が目につかび、その友たちの無念に込めるように歯を食いしばってそれらの仕事をした。

農場での植え付けや収穫作業は副収穫もあって比較的苦にならなかった。製材所の作業は、巨大な用材を転がし裁断機にかける仕事で、全員力を合わせて怪我のないようにやりこなして、ロシア人労働者が日本人の質の良さを認めていた。冬場の電柱建ても、凍結した表土を焼き火をして穴を掘り、柱を建てるのもロープを使って木を起こす等、随所に力と技を駆使する手法で、万事団結して前向きに仕事をやりとげた。各所で様々な仕事に関わり、一般のロシア人の生活状態を我々と比べてみると、給与、持ち物、知能等は日本人

が抜群の生活をしてきたことが認識できて、作業現場では悪感情はなかった。このことは後日に知ることになったことだが、収容所の位置と日本側の対応が良かったからかと思う。これには、大田部隊長をはじめ指揮班の人たちが労働、給与などについて懸命に希望条件を申し出、善意の配慮を受けた努力があつたと思う。同じ人間であり、銃火を交えた部隊でなかつたことも一因かも。

幸いにして私は一人の死亡を見ることもなく、私自身も病気で休んだことはなかつたが、二十年十一月頃と思う、ロシア軍医による凍傷予防の注射が行われた。厳しい冬に備えて、ある農場の倉庫の一角で、各々右肩下に太めの注射器で立ったままの手当てであつた。一、二日後腫れあがり、遂に切開することになり、誰言うともなくスターリン傷と名称をつけて、三日ほど公認の休養となつた。

昭和二十二年三月末に作業優秀部隊としてイルクーツクを出発し、ナホトカに向かった。ダモイである。貨車はダモイ小唄等賑やかな乗客を満載、失望に沈ん

だかの日のシベリア鉄道を逆に走つた。

部隊の今日までを守つてくださった老将は一緒ではなかつたが、後日元氣でお帰りになつたと聞いて安心をしている。

さながらに宵待草の部隊長

雪降る夕べ、曳かれ帰るを

寒い日の作業に出るとき、また雪に包まれてとぼとぼたどりつく収容所の入り口で、何度彼の姿を見て感激したことか、我ら皇軍の兵であつた。

復員船の港ナホトカでは、約三カ月は長くもあり、希望の光を見ることができたために全員の日々は朗らかだつた。作業はレンガ積み作業で、一輪車に積んだレンガを板橋を使って運ぶロシア職人の手伝いで、五時になつたら一切明日の仕事になることはしない主義でわれわれは楽であつたが、彼らはダモイ、スパーチと大声を発して私たちに早く帰れと至つて親切であつた。

船を待つ飯の幕舎では多少の民主化と称する勉強会や演芸等も行われ、奥地の生活とは雲泥の差であり、

残った人たちのことを心配した。

六月二十二日に待望の復員船への乗船である。船尾にひらめく日の丸の美しさに第一大拓丸は私たちを待たせてくれた。乗船の列の中で親しく激励し合った友と肩を叩き合いながら、満面微笑をこらえる如く顔を見合わせた。後にも前にも、みんなみんな頑張ったラーゲルの戦友の顔々。一歩ずつロシアを後に、一歩一歩祖国日本へ近づきつつあった。乗船待ちの同胞が手を振って送ってくれていた。一足先に帰るけどきくと皆さんも近いうちに帰れるからと心で詫びを言いながら、夢路を走るように足は急ぐ。

鉄の緒は足になれどこの船に

乗れぬ悲しさ 砂に書く文字

今日の日までには私にも長い愁いの日があった。早く帰りたい日本であった。船内も特別なことも起こらず、病弱な人たちに声をかけ乗船できたことを喜び合っていた。

波の背の背に揺られて揺れて

月の潮路の帰り船

払暁、波静かな舞鶴湾に船は滑り込む。日の丸の旗が我らの胸の鼓動を伝えるようにはたはたと鳴っている。木々の緑は美しく、針葉樹だけのシベリアとは山の違いを見せている。段々畑の麦穂は熟れ始めていて、平和な母国日本への上陸となる。出迎えの人々はこぼれる笑顔で労をねぎらってくださった。みな感激の涙を拭うこともなく、涙の顔をそのままに招じられた青い畳の間に、そして夢に見た日本の白米のきらきら光る食事を頂いた。

各々の県へ町へ、まさに帰心矢の如しで戦友相互の別れの言葉は宙に浮いていた。

途中夜の大阪駅に停車した。戦災の廃墟を見た。一目で知るその無惨、第三国人たちの争いの言動、暗い気持ち、同時に世情の貧困さを憂う。四国に渡り、長く苦楽を共にした高知の三人と別れる。長崎の中島少尉殿や山口、大分の面々、皆散り散りに故郷へ帰って行った。

私は松山よりただ一人、母たちの待つわが家へ。中国戦線から兄も復員していて、暫くわが家で長い青春

の空白を埋めた。

旧曆七月七日の七夕祭りの日に、町の主催で行った青年活動の行事として、私に何か話して欲しいと相談があった。急なことではあったが、「郷土と青年」と題して復員報告を兼ねてシベリアの体験を話した。珍しくもあって熱心に聞いてもらった。私は、敗戦国の再建はまず食糧を充分自給できることが第一で、それには農村青年の奮起が第一だ、今もシベリアでは餓死寸前で酷使されている、働いて日本人が空腹にならぬように頑張らうと呼びかけた。

それから私が農村に定着する要因が次々とできて紆余曲折、まさに九（苦）折の路を求めて歩くことになったが、一貫して農林業団体に奉職約四十年、現在も農村青年のささやかな一助となることを楽しみに勤めに励んでいる次第である。

ただ一つ痛恨、独り泣くは、苦楽を共に四十年間、谷間の白百合の如く暮らした妻を亡くしたことである。十数年の歳月を経て心身に堪えているが、その他のことはシベリアの辛苦を思えば何ほどのことか。一

人は万人のために、万人は一人のために、この協同組合精神に強く共鳴し、「一粒を万粒」に育てる農業を愛し、一樹一木、一歳一年輪の樹木を撫育し、国土千年の安泰を願っての森林創りを楽しみにしている。風雪に戦友と耐えたシベリアを故郷の山にその姿を求めつつ、夏が来る度に南嶺の宮庭で拝聴したご聖断はここにかの日から五十余年、十九歳の特幹兵が**臍**を決して参軍した悠久の大義は老兵の心奥に今も生きていて消えることはない。

この夏シベリアの大地に今も眠る戦友を訪ねて、声涙共に下るため涙泉ごとくとく潤れつくした。

なお、余命天がわれに賜るならば、かの大戦において国家のために散華した尊い尽忠の英霊に全域を訪ねて香華を捧げたいと念じている。その間には、野に山に各々の友人と勤労の汗を流すことは言うまでもない。

祖霊眠る 吾が古里は伊予の国

山 美しく 蜻蛉（あきつ）舞ふさと



【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年十二月十二日生

昭和十六年四月より昭和十九年三月 光海軍工廠に勤

務（山口県）

昭和十九年八月十五日 中部一三一部隊 特幹二期生

昭和二十年一月 満州第二気象連隊

十月 イルクーツク収容所

昭和二十二年六月 第一大拓丸にて復員

復員後は、故郷にて合併農協の管理職。その後、森

林組合の参事。くみあい人材センター。

現在は農協にて、結婚相談センター主任として活躍

されている。

温厚な性格と親切さは抜群、シベリア参にも数回

参加。

（愛媛県 山本 繁夫）

シベリア抑留記

愛媛県 田中 純

一、出生と職業

私は北条市に、大正十四年十一月、父佐次馬、母シ  
オエの、姉二人弟一人の長男として出生。父親は尼崎  
汽船の船員。

昭和十六年、北条尋常高等小学校高等科三年卒業。

同年四月、南満州鉄道株式会社哈爾濱技術員養成所

に入所のため渡満、二カ年の技術習得をする。

昭和十八年、奉天鉄道工場に配属、客貨車課に勤

務。

昭和十九年、突然の社命により公主嶺へ出張を命ぜ  
られる。このことは一切他言しないではしいとのこと  
で、簡単に身辺の整理をすませ、翌朝列車で公主嶺に  
向かった。集合先の満鉄厚生会館に既に到着している  
人達は、各鉄道局より選ばれた満鉄社員の集まりであ